

徳久 ほう 報

No.0025

発行
令和元年11月

発行元 徳 泉 寺

仙台市宮城野区
榴岡 3-10-3

(022) 297-4248

十一月同朋会より

孤独死ってなんだろっ



十一月の同朋会では『孤独死』について話題があげられました。家族と同居しながらも気づかれず亡くなった人について描かれた漫画の1ページと、新聞の投書欄を題材に、孤独とはどういうことなのか、何を持って孤独というのか、そして誰もが迎える死をどのように迎えるのか、そんなことを語り考えました。

新聞の投書欄には五名の方の次のような意見が掲載されていました。

- ・何より残念 悲しむ人いない死
- ・姉に学んだ 死に方より生き方
- ・できるなら孤独死を選びたい
- ・穏やかに迎えられれば悪くない
- ・人生は物語 死はほんの一場面

(2019・11・7 朝日新聞より)

これらの記事からは、迷惑かけたくないとか苦しんでいるところを見せたくないという気持ちや、やはり誰かに見守られて亡くなっていきたいというような率直な意見が読み取れました。

孤独とは一人であることではなく、人の中にもかかわらず気

持ちが通じないこと、心が通わないことだと仏教では捉え、その状態を『地獄』と言います。

一方、私たちは「死」をなかなか身近なものとは捉えられず、どうも他人事のように感じてしまいます。しかし「無常(いつも同じではないこと)の風」がひとたび吹けば「朝(あした)には紅顔ありて夕べには白骨となれる身」(朝、頬に血の通う紅い顔をしていても夕方には白骨となってしまふ身)を生きていることに間違いはありません。この儂い命を生きている私たちが存在する意味や帰る場所を見い出せないとき孤独を感じ、そういう中で死を迎えることを孤独死というのでしょうか。

住職の話を聞いて、Tさんがこんなお話しをしてくださいました。

私は一人で生活してますが、八十歳を過ぎてから「亡くなつてしまった夫や知人などをよく思い出すようになりました。でも、それは寂しさを伴つものではなくて、(あの人なら今の私を見てどんな風に答えてくれるかな)とか(あの人のおかげで今の私があるのだな)といったような温かい気持ちと共にいつもあります。それに、伊達に歳を取ってるんじゃないんです。いろんなことを積み重ねてこまできてね、本人がどう生きるべきかなんかと思つのよ。だからちつとも孤独とは感じないし、そもそも「孤独死」という言葉には違和感を感じています。あれは、第三者が勝手につけた名前じゃないかと思つんですよ。

前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪(とぶら)え

《道緯》

と言う言葉があります。私たちはなくなっていく命の中で、前(さき)に生まれた方たちの声を聞きながら生き、後(のち)に来る人たちのことを思つて、自身を生き切っていくことこそが大切なのではないかと考えさせられました。